



人間生活学部人間生活学科

【連載】研究室への誘い

- 人間生活学科 准教授 竹原 明美 (専門：家庭科教育)
- 人間生活学科 4年 舛田 梨紗 (徳島県立那賀高校出身)
- 人間生活学科 4年 吉本 実由 (高知県立四万十高校出身)
- 人間生活学科 4年 原田真由子 (徳島県立城北高校出身)
- 人間生活学科 4年 宮里恵利花 (沖縄県立北谷高校出身)

●竹原先生にお聞きします。人間生活学科の学びのポイントを教えてください。

人と生活について科学的・文化的に学び、より豊かな生活を送るためにはどうしたらよいかを考えていきます。そのために食・衣・住・保健・養護・環境問題・経済・消費者教育など幅広く学びます。そして、生きる力を伝える家庭科教諭・養護教諭・保健科教諭の養成をサポートするとともに、就職に有利なフードスペシャリスト・医療



山城祭での鹿茸製品販売の様子

秘書・消費生活アドバイザー・カラーコーディネーターなどの資格がスムーズに取得できるようサポートしています。

●人間生活学科にはどんな研究室(各研究室の研究テーマなど)がありますか？

藤田義彦(学科長) 研究室
・衛生学、公衆衛生学
DNAによる農畜産物の品種識別に関する研究、科学鑑定の標準化に関する研究

永山績夫 研究室
・食品衛生学
食の安全性に関する研究

岡部千鶴 研究室
・家族関係学、家庭経営学、消費者行動論
家族を超えた関係の形成、ケアの社会化など、家族の問題を社会的な広がりで見える視点からの研究

竹内理恵 研究室
・養護実践学、看護学
現場と協力して養護教諭の実践力を高める研究

竹原明美 研究室
・家庭科教育法、調理学
家庭科での有効的な教材開発に関する研究、鹿茸の研究

●学生さんたちの雰囲気はいかがですか？なかでも、このコーナーで取材する学生さんは、どのように取り組まれていますか？

学生と教員の距離が近く、学生が気軽に質問や相談がしやすい雰囲気があります。また、学生同士は仲が良く、お互いに助け合いながら勉学を中心に充実した日々を送っています。

近年徳島県において野生鳥獣被害が深刻で、イノシシ・猿・鹿による農作物被害が

全体の94%も占めています。特に鹿については捕獲してジビエ料理に利用されていますが、皮は廃棄されているのが現状です。そこで研究室では、鹿茸を有効利用できないかと昨年度から「鹿茸の研究」に取り組んでいます。2016(平成28)年度は手探り状態でしたが2017(平成29)年度は、「鹿茸の染色」や「中学校教材への取り入れ」、「鹿茸で製作した小物の販売」をテーマに研究しています。この研究を支援してくださっている県庁の方や革職人の方、染織家の方々の工房へは全員で取材に向いてお話を伺ったり、助言をいただいたりして研究室の学生同士が情報を共有しながら研究に取り組んでいます。

●続いて学生の皆さんにお聞きします。人間生活学科に進学しようと思ったきっかけ、理由はなんですか？

舛田：高校3年生の時に養護教諭という職業に興味をもち、その免許が取得できると知ったからです。本学では他にも養護教諭の免許が取得できる学科はありましたが、人間生活学科は少人数教育のため、先生のサポートがしっかりしているのではないかと考えました。また、養護教諭の免許以外にもさまざまな免許や資格が取得できるところにも魅力を感じました。

吉本：きっかけは、高校生の時に参加した徳島文理大学のオープンキャンパスです。その時に、人間生活学科では家庭科教諭と養護教諭、保健科教諭の3種類の免許が取得可能であることに魅力を感じました。

宮里：高校時代、家庭科の教員になることをめざしていた私は、進学相談会などで説明を聞いたり自己分析をしたりする中で食物に特化するのではなく、食衣住をはじめ、家族についてなど生活に関わることをもっと深く学びたいと思うようになりました。また、生け花や裁縫、料理など趣味の領域だっ



鹿茸を使った製品を持つ舛田さん

たことについても、より詳しく学べるところにも魅力を感じていました。人間生活学科の柔らかな雰囲気が入学の決め手です。

●現在所属している研究室(ゼミ)を選んだきっかけ、理由を教えてください。

舛田：私は「絶対にこれを研究したい!」というものが特になく、そんな時に先輩方が研究していた鹿茸の研究の発表を聞き、私も少し興味をもちました。また、竹原先生は親しみやすく話しやすいと思ったこともこのゼミを選んだきっかけです。クラスで信頼している友人もこのゼミに入るということで、一緒にがんばろうと思える存在がいたことは、一つの大きな理由でもあります。

吉本：私は、中学校の家庭科の授業で利用することができる教材の研究をしたかったため、この研究室を選びました。

宮里：当初は「食事環境に対する人の幸福感の違い」についてや家族に関することなど、研究したい内容が家庭科の分野のものが多かったため、このゼミを選びました。大学3年生のころに鹿茸の利用の研究を始め、鹿茸を使った製品を作り、その中で「鹿茸を染色したらもっとたくさんの製品ができるのではないか」と思い、4年生でも竹原ゼミで鹿茸の研究を続けようと思いました。

●現在の研究内容を教えてください。

舛田：鹿茸を用いて作ったものを商品として販売することで、鹿茸の利用と販売を結びつけた研究をしています。鹿茸がどのように利用できるのか、そして、それをどのような過程で製作し、どのくらいの値段で売るのが妥当なのかなどについて、実際に自分たちで作ったものを山城祭で販売し、研究を進めてきました。

吉本：鹿の生態や、鹿が引き起こす環境破



吉本さんが製作した布絵本

壊などの獣害について生徒に教えることができるよう学んでいます。また、家庭科の中の「被服」や「幼児」の単元の教材としても活用できる布絵本の製作を研究しています。

宮里：現在は鹿茸の製品化の幅を広げるため、鹿茸の染色の研究を行っています。染色の中でも徳島県の伝統工芸である「藍染め」に注目して研究を進めています。

染色時間や染液の違いによる色の変化・染まり具合を実験してみたり、製品化に向けての課題を出したりしています。

また、神山町で鹿茸を活用してオリジナルバッグの製作をしている「鈴木カバン」さんに鹿茸活用についてのアドバイスをいただいたり、染め師さんや小松島西高校の先生からも藍染めについて教わったりと、たくさんの方に研究に役立つ知識を教えてくださいました。

●これからの目標、将来の夢を教えてください。

舛田：私は卒業後に金融機関に就職するため、鹿茸の研究で得たさまざまな知識をいかして、相手の気持ちを理解して仕事ができる社会人になりたいです。また、人間生活学科で学んだ食・衣・住の知識を自分自身の生活に反映し、温かな家庭を築きたいです。

吉本：今後は、地元である高知県の家庭科教員になり、この研究室で研究した知識を生徒たちに伝えられるよう、教員採用試験の勉強をがんばりたいと思います。

宮里：これからの目標は、もっと藍染めについての知識をつけることと、研究で気になることがあればとにかく挑戦してみたいです。将来の夢は、研究で培った探求心・探究力を社会人になっても忘れず仕事に励むことです。また、出身地である沖縄県や徳島県の歴史や伝統工芸に触れ、それらに関する知識をつけて、歴史や伝統を守っていきける人になりたいです。



鹿茸の藍染め実験を行った宮里さん